



僕 発達障害？

宮城小児科医院
宮城 英雅

(居た居た)

20年ほど前からでしたか、発達障害と呼ばれる性格の人が存在することが解ってきた。その概念や症状を学んでいくうちに、???と脳裏をかすめていく場面が浮かんで気になりだした。過去に全くその通りと言う感じの人が幾人か居たようだ。そうかそうかと面白がっていたら、オヤー自分も似たようなことをしていたのではないか。

(思い出す)

2人の姉や2人の兄達に「お前は子供の頃、服が少し濡れては着替え、一寸汚れたと云ってはすぐ着替えていた。」1日に3~4回といわず、10回位も。4・5歳頃の事です。綺麗好きというかお洒落と言うか目に余る存在であったらしい。その言い方は、からかいと侮蔑の気持ちが込められていたので良い思い出ではない。之は発達障害児特性の触覚過敏では無かったろうか。

(更に思い出す)

兄たちが、学校へ出払ってしまうと、蓄音機の前ででんと座り、蓋を開ける。プーンと独特の機械油のおいが嗅覚を刺激する。これからすることに気分が昂ってくる。(これまた特性の嗅覚過敏なのか単なる記憶なのか)

(記憶)

蓄音機の傍に積み重ねられた30枚ほどのレコードの一番上の一枚を取り上げる、当時のレコードはペラペラの茶色い紙袋に入っていた。それにはマイクに向かっている犬(ビクター)、四角くデザインされた獅子(キング)のトレードマークがあった。然しテイチクとかコロンビア等は記憶にない。

(陶醉)

蓄音機の奥のフックに掛けられたハンドルを外し、右側の壁にある穴に差し込みぐるぐる回すゼンマイ仕掛けであった。ハンドルの回転が初め柔らかく次第に固くなっていく。腕に快感が伝わってくる。レコードを載せて、アームを動かすと回転し始める。蓄音器のヘッドをそっとレコードに置く。長じて解ったことだがそれは78回転のSPと言われたもので回転速度が速かった。さてレコードが回り出すと、その溝が1本ずつ剥がされて中央部分に吸い込まれて行く。(様に見えるのではなくそう思い込んでいた)。溝は透明感があり、柔らかな感じを醸して、心がとてもうっとりして安らぐのでした。(聴覚過敏・回転物が好き うっとり)

(音楽のジャンル)

レコードは童謡を初め流行歌・国民学校唱歌・軍歌・軍国歌謡等種々積まれていて、それを上から順に片端からかけるのでありました。その所為か兄たちの知らない歌を僕は歌えるのでした。ええ、社会人になっても覚えているのです。(こだわり 聴覚過敏)

(唯我独尊)

メロデーはかなり正確に歌詞はかなり曖昧に覚えている。流行歌にそのようなことはないが、童謡には戦後一度も聴いたことが無い曲も数曲あって、今でも口ずさむことができる。という事は自分の知る限りそれらの曲は現在の世の中で僕だけが知っていることになる。

(音感)

長じてからエレクトーンを習っていた頃、楽器を弾くのは下手であったが、先生の弾く簡単な即興曲を追いかけて歌えたものだから、先生は面白がってリズムを変えて弾くとほぼその通り歌う。次第にむきになって曲は長めになり、メロデーは変わり、テンポも変わるが、その通りさらっと歌うと「バランスの悪い変な人だ。」と笑って言われたことを覚えている。そう言えば日常生活でのいろいろな音も音階で口ずさんだりしていた。「ミードーミードー」は救急車の、「ドレミーレド・ドレミレドレー」は夜泣き蓄

麦の鳴き声である。工事現場の雑音も音階に置き換えたりして楽しんでた。絶対音階に強いことなのか。(運動神経の鈍と聴覚過敏)

(注意力)

天妃幼稚園に通い始めても人見知り、場所見知りの所為か長くは続かなかった。それにしても先生の顔やオルガンの蓋を開いた時の臭いの感じが残っている。(人見知りが強い)

「お前は何回同じことを言われたら判るのだ。」としばしば言われたことも耳に残っている。(注意欠陥)

疎開先の八代に車が停車した際「ロシアだ！」と叫び兄に頭をしごかれた記憶がある。未だ国民学校に入学していなかったが、字も読めたようだが、本を読んだ記憶は全くない。然し本棚を燃やしかけた記憶はある。灯火管制中に蠟燭をつけて本を探していて火が付いたのであろう。家人が気づいてボヤで済んだ。(注意欠陥)

(KY)

小学校5年生の頃、作文の時間に、見たまま聞いたまますを其の儘綴りなさいと言われた。僕のノートにはトラック・人・木・家・ワンワン・ブーン・プープー等単語だけが紙面一杯に書かれていた。単語だけの大集合であった。先生にこっぴどく叱られたことは言うまでもない(言われたことの其の儘しか理解できない。裏に含まれている意味を汲み取れなくて、空気が読めなかった。)

(性癖)

成人してからは雑誌や季刊誌のシリーズ物の記事は切り離してナンバーを揃え、ファイルする。レジ袋は綺麗に中の空気を抜き、取っ手の部分は振じれて紐のようになっているので、皺をきちんと伸ばして平たくする。角や縁を出来る限り揃えて丁寧に畳む。それらはサイズ別にまとめてられ、状差し用の釣り袋に収められる。

そして生ごみ入れになったり、野菜入れや食料品入れに再利用される。生ごみは屋敷の周囲の生け垣の根元に毎朝うめる。次々に隣りへと埋めてゆき、一回りするのに2カ月かかる。それは楽しい作業だ。植えた覚えはないのに、西瓜や瓜の芽が出てきたり、アボカドの木が7～

8本成長している。巨大な袋には庭のごみや落ち葉を入れて捨てる。(勿体無い ケチ こだわり)

(更なる性癖)

もうひとつ五百円玉のコレクションがある。初めは成り行きで返ってきたコインを貯金箱に放り込んでいたのだが、1年たつと数万円にもなっていた。之に気を良くして貯金箱の缶も大きくし、500円玉が戻ってくるように千円札と百円玉や、1円玉まで作る為、瞬時に計算し、小銭入れをかき回している自分が居た。或る時タクシーで千百いくらかを上げて、500円玉のご帰還を期待していたら、百円玉やら十円玉をざらざらと返されたことがあった。とても腹が立ったことを覚えている。「他人の意図を汲み取るこのできないべらぼうめが…。」と数日の間思い出しては腹を立てていたが、ひょっとしたら、500円玉が無かったのかなど気が付き、奴を許してやろうとやっところさ心が落ち着いてきたことがある。(他人の立場を理解できない)

(几帳面?)

調理器具や食器・文房具なども所定の場所がない時はパニックとまではいかないが、とてもイライラする。そう。僕は料理がすきだ。男性的な粗っぽい料理。(こだわり) そのくせ机上は目も当てられないほど散らかっていて几帳面ではないのだ。未整理の資料は乱雑に山積され、表面だけ印刷されて裏が白紙の紙はいちいち集められて、ファックスに使用されるのをホルダーの中で待っている。それらをかいくぐって、卓上テレビ、ポータブルステレオおよびそのコードなどが机を這い回っている。(整理が不得手)

(数字)

診察室ではデジタル壁時計を何気なく見たとき、4時44分とか1時23分、12時12分などであった場合、数字の並び方に感動する。とりわけ11時11分であったらとてもラッキーな心持になる。(視覚過敏)

(結論)

こんな自分を見ていると高機能発達障害・アスペルガー症候群かなと思ったりするが、自惚れもいい加減にしろですか。

実際如何なものでしょうか。



「北の都」の思い出

県立中部病院精神科
 (前県立精和病院院長)
 伊波 久光

金沢は、前田利家が1583年金沢城へ入城して以来、加賀百万石の城下町として栄えてきた。それ以前は一向一揆の居城が金沢城に隣接する尾山神社にあり、信長に滅ぼされて以来、大きな戦乱や震災もなく今日に至っている。第二次世界大戦においても機銃掃射による空爆を受けて60人ほどが亡くなったに過ぎない。言わば、400年間も街並みや風景がそっくり残っている街と言える。地形的には戦国時代に建立された城の特徴を示していて、犀川と浅野川に挟まれ、背後を山に囲まれている丘陵地帯の先端に金沢城があり、そのすそ野に町が広がっている。両川が城の外堀で、川の外側に寺院群と遊郭が設置されていて、町は徳川時代の外様のためか迷路になっていて、狭く行き止まりが多い。本学は金沢城址内にあり、城の背後の丘陵地帯の小立野地区に金沢大学の医学部や工学部があった。小立野街には多くの特徴ある坂が存在し、3番目の寺院群がある。さすがに遊郭は設置されてない。敵から攻めにくい天然の地形となっている。

私は祖国復帰1年前の1971年に国費学生として金沢大学に進学した。復帰前なのでパスポートを持参し、全員が船に同乗して鹿児島県に上陸後にそれぞれのグループに分かれて車で北上した最後の年代と言える。鹿児島湾で船上を飛んでいる自衛隊機の日丸に感激したことや初めての汽車の旅で北陸トンネルを過ぎると沖縄とは異なった冬の木枯らし風景に心寂しく感じたことを今でも思い出す。夜の金沢駅に沖

縄の先輩が迎えに来ていて、川の外側に立地した学生寮に案内してくれて金沢での生活がスタートした。平成元年に帰郷するまでの十数年を金沢で生活した事になるが、学生時代と社会人時代の生活や思い出が大きく異なっている。学生時代は数回引っ越しをしたが、基本的にバスや徒歩での生活で、不便ではあるが多くの坂と迷路の様な街並みを堪能した。社会人時代は車を購入したため、駐車場の確保のため、自然に街はずれに住むこととなった。生活も豊かにそして広域にはなったが、公道中心の凡そ、古都金沢とはかけ離れてしまい、ほとんど路地を歩いて楽しむことがないままに帰郷した。

2017年8月に大学の同窓会があった。2年前に病気をしたこともあり最後かとも考えて参加した。当初は金沢市以外も楽しもうとレンタカーを借りての4泊5日の計画を立てた。帰郷以降は学会や教授の祝賀会などに数回、金沢を訪れたが、日中の行事、旧知の人との再会と夜の飲み会以外に町を散策することもなかった。しかし、出発が近づくと連れて思い出すのは遠い学生時代の生活であった。結局、級友との交友や飲み会は最低限として、一人で思いでの街を散策することにした。車はキャンセルとし、ホテルも同じところで連泊とした。先輩の家に何年も使用せずに置かれていた電動自転車を借りることになり、まる2日間、朝から晩まで乗り回した。一般の観光客が自転車でゆっくりと観光しているのを尻目に、大学の寮を始めとして移り住んだ6か所の家と犀川、浅野川の川岸、通学に利用した狭い裏手の道や部活のトレーニングで苦しんだ坂道、座禅会で利用した3か所の寺院群と思い出の居酒屋や喫茶店など過去を確認する自転車行となった。寮は取り壊しの寸前であり、数件の思い出の建物は変わらずに残っていた。当時のよき思い出も苦い思い出もすべてが懐かしく感じた。

「二八に帰るすべもなし一四高寮歌」。